

2022年3月12日(土)

公開シンポジウム 「世界の高大接続の現状と課題」

日本学術会議 心理学・教育学委員会 高大接続を考える分科会
教育関連学会連絡協議会

バカロレア試験に見る
教育と社会のグランド・デザイン

—小論文による接続の形—

名古屋大学大学院 教育発達科学研究科

渡邊 雅子

報告のアウトライン

- ◆ 高大接続の現状・課題・対策－これまでの議論と知見
- ◆ (後半) バカラレア試験と小論文から見た接続
- ◆ 大学で求められる共通の要素と高校の準備教育
- ◆ <論理的>な議論とフランスの思考法－アメリカとの比較から
- ◆ 哲学と文学の小論文とその教育－政治的主体と共通教養
- ◆ 小・中・高校における論理的思考の段階的育成と書く教育
- ◆ 歴史・市民性教育との関連－共和国の価値観と小論文
- ◆ フランスの新たな取り組みと日本への示唆

フランスの高大接続に関する議論： 「大衆化」・「無選抜」・「教育の平等」

1. 特徴

バカロレアは中等教育修了と大学入学資格を兼ねる「**国家資格**」

(20点満点で平均10点以上が合格)

- ・バカロレア取得者は希望すれば**全員大学へ入学**できる(法律で規定/平等観)
- ・大学の**無選抜制**により**大衆化**の大きな影響を受ける(多様な学生)
- ・1985年バカロレア取得者80%の政策目標(職業バカロレアの創設)

2. 課題: **大学修了率の低さ**

・規定の3年で修了する学生は全体の約3割

・半数以上が留年、中退、または進路変更

・修了率の差: バカロレアの種類と学問分野

普通バカロレア > 技術バカロレア > 職業バカロレア(低)

理系 > 文系分野(低) (文系では卓越したフランス語の能力が求められる)

3. 背景: 後期中等教育の拡大政策→バカロレア資格の大衆化(8割取得目標の達成) (1960年には1割、1995年には6割、2019年には8割のバカロレア取得者比率)

フランスの高大接続対策： ① 進路の振り分けとマッチング

(夏目2020; 大場 2020; 田川2020; 坂本2021)

3. 政府の対策：「進路の不一致」と認識

- a. 技術・職業バカラレアの短期職業系高等教育機関への割当政策
(2013年) 高等教育の学習と合わせて職業の専門性を形成(STS/IUT)
- b. 高校と大学における進路選択支援(2018年のORE法)：
新高等教育登録システム(parcoursup)
 - ・志願者が一定数を超える大学での入学者の実質的な選抜の容認
 - ・志望動機に加え、高校の成績と推薦書の提出
 - ・提出書類の序列化の許可と社会的格差是正のための基準設置
 - ・大学でのリメディアル教育を前提とした条件付き入学(高校と連携)
 - ・「各学問領域で期待される要素」の提示と志願者による自己チェックの提出(高校での科目選択と大学の専攻及び各大学とのマッチング)

フランスの高大接続対策： ②バカロレア試験改革(2021年より施行)

目的：荷重だった生徒の負担軽減

- a. 普通バカロレアのコース分けの廃止：①文学系、②科学系、③経済・社会系→一元化してより試験を受けやすく、大学の接続をより自由に
- b. 必須科目数を減らし、選択科目を多く、哲学の比重を軽く
- c. 内申書と高校の成績の考慮

エリート資格だったバカロレア資格を大衆化の実態に合わせる

課題：学士資格のための試験基準や大学教育はそのまま
試験で問われる水準が高校と大学では乖離

「バカロレア取得80%」目標を受け、1990年代より加点圧力。
実質的な要求基準の引き下げがあった（細尾 2020:29）

フランスでは 高大接続の問題として論じられているのか

高校の教育目的には、大学への準備については述べられていない（学習指導要領にあたるプログラム）

フランスでは「大学における学業の失敗」の問題

・大学における高校とは異なる学習習慣や態度（田川 2021:200）

求められる高い自律性：留年・中退をする学生には、庶民階層出身者が多く、ハビトゥス（家庭での日常的、無意識に育まれる性向）が大きく影響→

制度改革では救えない。学生・学力の問題というよりは、「社会的な問題」

・対処①：複雑で見えにくい高等教育の全体を「見える化」= 庶民階層を意識した高校における「進路週間」の設置、オープンキャンパスにおける高校生と大学生の交流、大学教員が高校に出向いての説明会

・対処②中退希望者への進路変更支援策：高校と大学のマッチングシステムを戦略的に使いこなせることは庶民階層には困難。卒業後の進路を見据えた大学の中での「やり直し」の援助の取り組み（田川 2021）

もうひとつの視点

小論文で接続された教育の形 (渡邊 2021)

◆小論文を通して見るフランスという「別世界」

- ・バカラア試験は論述試験(決められた「型」で書く)
(数学・自然科学も論述ないし記述式。正答のみでは合格しない)
 - ・すべての科目・学習に求められる高いフランス語運用能力
 - ・考え、書く(小論文)ことが人生を決める
 - ・世界標準の米式エッセイとは全く異なる構造と論理
 - ・フランス革命後の「新しい社会と教育の論理の象徴」として
100年余りの試行錯誤から創られたディセルタシオン
 - ・小論文執筆により、フランス社会の「思考法」を身につける
＝バカラア試験は「フランス市民」になる通過儀礼
- さらに高等教育の基礎技能・態度の育成とその先の社会を接続

職業訓練の場でも専門家養成のためでもない中等教育の位置づけ

バカラレア試験の準備教育と高等教育 何でどのように接続しているのか

「各学問領域で期待される要素」の全国枠組み(2018年)

文系・社会学系の学問領域に共通の要素(詳細は田川 2020 参照)

「論理的に議論するための口頭・筆記表現の活用ができること」

・高校3年間のバカラレア準備教育は「共通の力」の育成に対応

「読み、講義を聞き、暗記し、議論し、書き、添削済小論文を推敲する」過酷な訓練と、「書くように話す」口述試験の準備

=「フランスの教育の最良の部分」と高校教師は自負

そもそも論理的であるとは？

◆ 論理的であるとは・・・統一性と一貫性

「読み手にとって必要な情報が読み手の期待する順番で並んでいること」から生まれる感覚 (Kaplan 1966, p.14)

(論文の構造から)

「論理的である」ことは、読み手と書き手の間に「必要な情報」と「順番」に合意がある=社会的な合意により決まる(渡邊 2021)
論理学における論理(三段論法等)とは異なる定義→修辞学

小論文構造比較(米・仏・日)

(渡邊 2021:19)

エッセイ(米)	ディセルタシオン(仏)	小論文(日)
導入 主張を述べる	導入 1. 概念の定義、2. <u>問題提起</u> 、3. 問いによる全体構成の提示	導入 主張を述べる
本論： 主張を支持する 3 つの事実	展開：弁証法 a. 定立 (正 : <u>thèse</u>) b. 反立 (反 : <u>antithèse</u>) c. 統合 (合 : <u>synthèse</u>)	本論： 主張の根拠 2 つ 「だがしかし」と主張と別の見方を挿入
結論 主張を繰り返す	結論 全体の議論のまとめと結論、次の課題の提示	結論 「それでもやはり」と自己の主張の正しさを述べる

論文構造と論理の米仏比較

(渡邊 2021)

	エッセイ	ディセルタシオン
構造（論理）	主張+主張を支える事実+結論	弁証法（正・反・合）
特徴	最初に結論を述べる:的を射る矢	<反>が<合>を導く
目的	説得・主張の論証	矛盾の解決・より大きな視点の提示
論拠	経験知 経験的な事実・統計のデータ	体系知 著名な作品・思想・概念の引用
重点	序論=結論（=結果）	展開部分（=議論のプロセス）
書き手	真正の自己（authentic voice）	修辞学的な自己・拡大された思考
背景	高等教育の大衆化に対応。誰にでも書ける簡便な型の創出	革命後自律して考え判断し行動できる政治的な主体育成のため創出
利点・欠点	経済的効率性（単純化）	政治的判断のための熟慮（複雑）

哲学の問題(問い合わせ)

「国家への服従は常に義務か」(4時間)

【導入部】(Introduction)

- ①国家とは何かの定義(ルソーの社会契約論をもとに定義)
- ②論文全体の構造を示す正・反・合を導く3つの問い合わせ

【展開部】(Dévelopement)

正:「国家への服従は<常に>義務か」(ホップズ・スピノザを引用し論証)

反:「なぜ国家への服従は<常には>義務でないのか」(マルクス等)

合:「なぜ国家への服従は必ずしも義務でなく、意志だと考えられるのか」
(ルソー)→総合:服従は個人の意志と自由の発現となる

【結論】(Conclusion)

国家への服従は義務になる場合とそうでない場合があり、国家への服従は常には義務でない。ルソーの社会契約論からは、個人の意志による「服従の積極的な意味」を見出すことができる。では「強制された意志」はあり得るか。(詳細は渡邊 2021参照)

弁証法と哲学教育の意味:小論文の構造に仕組まれた学問探究の基礎技能と態度

<問題提起(problématique)>の機能: 構想力・抽象化する能力(高等教育必須)
主題のどの側面を論じるかを書き手自らが決定。概念を定義
問い合わせを作り直し正・反・合を構想(全体構成planの重視)

<反>の機能: 常識と暗黙の前提を疑う(学問探究の基本的態度)
信じていたことを一度否定することで別のあり方へと目を向けさせる哲学教育の目的は、これまで学校で習ったすべての知識を審議にかける事＝フランスの高校は抵抗することを教える

<合>の機能 前提を変える(学問探究の究極目的のひとつ)
意味付けを変える→矛盾を解決し、より大きな視点を得る

<引用>の機能—論証の基礎 論じる「材料」のための暗記(主体的学習者)
先人の考えを配置し意味づけ・権威にも用心する・共通の基盤を根拠に論じる

文学を論理的に論じる: 文学の論述問題

同じジャンル・テーマの3～4つのテクストの抜粋を提示し、3つの大論述試験問題から一つを選んで書く(例は論証(Argumentation)ジャンルの問題 追悼演説

- * 基本問題(*question*:全員が解答)

作家たちは4つのテクストで、人間のどのような性質を讃えているか。

- * テクスト評釈(*commentaire de text*)

アナトール・フランスのテクストについてコメントせよ。

- * ディセルタシオン(*dissertation*)

作家の本質的な役割とは、人間の偉大さを讃えることなのだろうか。

- * 創作(*écriture d'invention*)

追悼の機会に、あなたが崇拜する作品の作家について賛美せよ。提示されたテクストの追悼文の中であなたの視点から最も有効だと思われるスタイルを再利用しても良い。=再利用が望ましい。

問い合わせによって構造を使い分ける 3つの問い合わせの形と3つの構成方法

1. 閉じた問い合わせ (*question fermée*)

「...は...か(否か)」・「はい／いいえ (oui／non)」のタイプ

→弁証法の構成

2. 開いた問い合わせ (*question ouvert*)

「.....とは何か」「.....とはどのようなこと・ものか」、「.....であることを示せ」

→主題に基づいた構成 (*thématische*)

3. 比較 (*comparaison*)

「比較せよ」「どのような違いがあるか」「特徴を示せ」

→比較に基づいた構成 = 複数の特徴を一貫して比較

文学を論理的に論じるための仕掛け

教育目的・教育法・学習法

1. コーパス(corpus)による教育

テーマでグループ化されたテクストによる教育法と教養の形成(教師が先達)

2. プログラム(学習指導要領)による文学ジャンルとテーマの選定

文学を学ぶ意味の明示: 人格の形成、フランス市民の育成、教養の育成(フランスの教育の大目標)。人文学的思考へのアプローチを示す = 人間とは何かについて深く考えさせる(英雄と悪人の可能性と限界)。

3. 文学史: 主観的になりがちな文学鑑賞を文学運動・思想史・美術史・政治史に位置づけ客観的に行う。文学分析の概念の習得と使いこなし。

4. 学習方法: 「仮説を立てて、解釈を提案する」

「個人的な鑑賞を行い、それを論証して正当化する方法を知る」、
「分析のために文法を活用する」 (詳細は渡邊 2021 参照)

文学教育の内容(バカラレア試験と対応)

学習の対象（文学ジャンル）	学習すべきコーパス
小説（17世紀から現代まで）における人物像	小説一冊、3～4編の抜粋をグループ化したテクストを一つまたは二つ、美術史に関連した資料
演劇（17世紀から現代まで）特有の表現方法	演劇1作品、3～4編の抜粋をグループ化したテクストを一つまたは二つ、古代の文化と言語に関連した資料ないし作品
詩（中世から現代まで）における意味と感覚の探求	詩集1冊、3～4編の詩をグループ化したテクストを一つまたは二つ、美術史に関連した作品ないし資料
論証（16世紀から現代まで）における人間にに関する問い合わせ	統一性の強いテクスト群ないし長いテクスト、3～4編の抜粋をグループ化したテクストを一つまたは二つ、古代の文化と言語に関連した資料ないし作品



フランスの書く教育にみる 教育のグランド・デザイン

(渡邊 2021)

- ◆ すべてのカリキュラムは幼稚園から高校まで「フランス式小論文(ディセルタシオン)で書けるようになる」ために綿密かつ段階的に組まれている
- ◆ 段階的な書く教育
 - * 小学校では・・「正しい文法と繰りで文が書ける」
 - * 中学校では・・(個人の体験を離れて)
「資料をもとに意見文が書ける」
 - * 高校では・・「仏式小論文の型で考え書ける。問い合わせの種類によって書き分けられる」

論理的思考の段階的な訓練

フランス語科目：文法→論理学→修辞学

◆ 小学校で教える論理（文法・描写・説明・物語）

文法：言語の規則から論理的一貫性を学ぶ（分析と統合の方法）

書き取り(dictée)：熟考させる言語技術の総仕上げ

語彙：厳密に考え、感じるための選択肢の提供

辞書引きの習慣：定義することの第一歩

物語を書く2つの機能：視点の一貫性の論理、ジャンルとしての物語

描写：空間的配置（肖像）・時間的配置（レシピ）

◆ 中学校で教える論理（*connecteurs logique*：論理的結合）

論証する：自然の配置から論理の配置へ

◆ 高校で教える論理

問い合わせによって論文の型を使い分ける・弁証法という思考の飛躍

→論理的一貫性と論証の厳密性の訓練から思考の飛躍へ（渡邊 2021）



フランスの歴史教科書(5年生)

Chapitre 13

3. L'école de la République

Au cours du XIX^e siècle, les gouvernements ont développé l'enseignement pour qu'un maximum d'enfants apprennent à lire et à écrire. Mais c'est sous la III^e République que la scolarisation a pris toute son ampleur.

1 Le projet de Jules Ferry

Entre toutes les nécessités du temps, entre tous les problèmes, j'en choisis un auquel je consacrerai tout ce que j'ai d'âme, de cœur, de puissance physique et morale: c'est le problème de l'éducation du peuple. C'est une œuvre pacifique, c'est une œuvre généreuse, et je la définis ainsi: faire disparaître la dernière, la plus redoutable des inégalités qui viennent de la naissance, l'inégalité de l'éducation. L'inégalité d'éducation est, en effet, un des résultats les plus criants et les plus fâcheux, au point de vue social, du hasard de la naissance. Avec l'inégalité d'éducation, je vous défie d'avoir jamais l'égalité des droits, non l'égalité théorique, mais l'égalité réelle, et l'égalité des droits est pourtant le fond même et l'essence de la démocratie.

D'après un discours de Jules Ferry à l'Assemblée nationale, 10 avril 1870.



- Quel était le projet de Jules Ferry ?
- A quoi vois-tu que Jules Ferry y était très attaché ?

- En quoi l'inégalité de l'éducation empêche-t-elle l'égalité des droits ?
- En 1833, en 1841 puis en 1892, des lois ont été votées pour interdire le travail des enfants: en quoi sont-elles favorables au développement de l'enseignement ?

2 L'école gratuite, laïque et obligatoire

En 1881 et 1882, Jules Ferry fit voter des lois rendant l'école gratuite, laïque et obligatoire: gratuite pour que tous puissent y accéder (c'est donc l'État qui payait), laïque pour respecter les opinions religieuses de chacun, et obligatoire pour que tous les enfants aient la chance d'y aller. A partir de 1881, toutes les communes durent avoir leurs écoles. Toutefois, des écoles « libres », tenues par des religieux, continuaient d'exister pour ceux qui le souhaitaient.

- Pourquoi est-il important que l'école de la République soit laïque ?
- Pourquoi est-il important que l'école soit obligatoire ?
- Pourquoi l'école doit-elle être gratuite avant d'être obligatoire ?

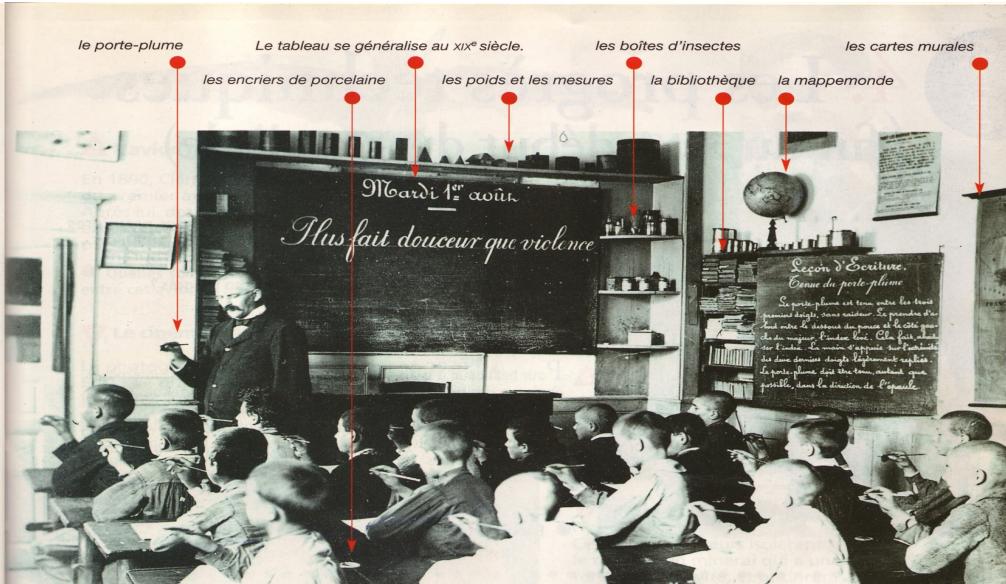


En général, les garçons et les filles fréquentent des écoles séparées.

L'école et la mairie, les deux symboles de la République, étaient souvent voisines.

GOUPILLÈRES (Eure)
Ecoles et Mairie

Imp. A. Beaud, Brin



3 Des classes mieux équipées

- A quelle date cette photo a-t-elle été prise ?
- Qu'en déduis-tu ?
- Explique la morale écrite au tableau.
- Qu'est-ce que ce maître est en train d'apprendre à ses élèves ?
- D'après le matériel de cette classe, quelles matières étaient enseignées à l'école à la fin du XIX^e siècle ?

LEXIQUE

laïc: indépendant de toute religion.

la patrie: le pays où l'on est né.

le patriotisme: l'amour que l'on porte à son pays, à sa patrie.

4 Former des patriotes

A l'enseignement historique incombe le devoir de faire aimer et de faire comprendre la patrie. Tout l'enseignement du devoir patriotique se réduit à ceci: expliquer que les hommes qui, depuis des siècles, vivent sur la terre de France, ont fait une certaine œuvre à laquelle chaque génération a travaillé; qu'un lien nous rattache à ceux qui ont vécu, à ceux qui vivront sur cette terre. Enseignement moral et patriotique: c'est là que doit aboutir l'enseignement de l'histoire à l'école primaire. N'enseignons point l'histoire avec le calme qui sied à l'enseignement de la règle des participes. Si l'écolier n'emporte pas avec lui le vivant souvenir de nos gloires nationales, s'il ne sait pas que ses ancêtres ont combattu sur mille champs de bataille pour de nobles causes; si il n'a point appris ce qu'il a coûté de sang et d'efforts pour faire l'unité de notre patrie; s'il ne devient pas un citoyen pénétré de ses devoirs, l'instituteur aura perdu son temps.

D'après Ernest Lavisse, Questions d'enseignement national, 1885.

- D'après cet auteur, quel était l'objectif de l'enseignement de l'histoire ?
- Pourquoi l'école était-elle le lieu privilégié pour développer le sentiment patriotique des Français ?
- Pourquoi des personnalités historiques comme Vercingétorix et Jeanne d'Arc ont-ils été mis en valeur dans les cours d'histoire à la fin du XIX^e siècle ?

voir résumé p. 172

小論文の教育と歴史教育の共通点 思考表現法の一貫性(メタレベルの接続)

歴史を視覚イメージで教える: 見えるものから見えないものを考察

- ・複数の解釈の提示が可能ー出来事の正・負両面を教えるー
- ・複数の資料から多面的に考えさせる訓練
- ・歴史的な象徴を通して抽象的な概念を教える

フランス革命の特別な位置: 理想化されないフランス革命・革命は未だ未完結
→公民精神、市民の自覚教育

不確実性に開いた未来: 偶然・感情・意図・長/短期の因果により歴史は作られる
→弁証法との関連: さらに大きな構図に向かって開かれている結論

年表へのこだわり: 部分と全体

- ・年表という全体の中で、学習している部分がどこに「位置づく」のか
- ・全体から与えられる「部分」の意味の読み解き(弁証法) (渡邊 2021)

システムとして働く教育 市民性教育との一貫性(哲学の方法)

- * 言葉の定義を通した合意形成と共通の文化の構築
 - * 「人種差別(racisme)とは何か」(小学校の討論)
 1. 主題(「人種」)の定義を行う(参加者全員が考える定義を述べ、共通項を探って定義の輪郭を作る)
 2. 歴史の例から定義する(歴史の例を挙げ、定義をより精緻なものにしていく)
 3. 歴史的淵源を探る(例から現代の問題に繋がる淵源を特定)
 4. 主題の本質の同定(抽象化)(人種は存在しないという結論)
 5. 本質的定義に沿って現代の事例を再考察する

カリキュラム・教育法では接続があるが… 「高校」で教えられる小論文と 「大学」の学問教育における小論文

中等教育まで…

「熟慮して政治的判断を行う**自律した市民**ためのディセルタシオン」
モデルは哲学とその方法→フランス革命後の血みどろの歴史と失敗を繰り返さないため、極端に振れず熟考して既存の権威も審議にかけ結論を出す。**個人の自由や目的達成よりも社会福祉・共通善を優先させる共和国の価値観**を反映した思考と表現のスタイルを生徒に内面化させる→ゆえに 定型化して教えることがタブー視されていた（渡邊 2021）

大学では…

「学問探究の手続きとしてのディセルタシオン」
各学問領域で論文（ディセルタシオン）の書き方と思考法は分化していくしかし 明確には教えられていない（住谷他 2005）

小論文執筆の課題に切り込む フランスの高大接続の新たな取り組み

- * 技術的な問題を政策的に処理することに加え、より根源的な解決の模索と試行
- * 鍵は①大学入学までに一定水準の小論文が書けるようになっているか(高校の課題)
②高校の小論文と大学の小論文の何がどう違うのかの明示(大学の課題)
- * 大衆化された中等教育で学ぶ全ての生徒が理解できるような「**論証訓練の不文律**」と
小論文執筆の修辞学的な「暗黙の前提」の解明の必要性(Ferry 1999)
- * アメリカで初年次必須のCollege Compositionのような授業を各専門分野でフランスでも
- * 教育と文化資本の関係に切り込む研究:政策として導入された「個別指導」が、いくら時間をかけてもほとんど効果が無かった反省 ↓
 - * 「授業研究」というミクロなアプローチの試行(ボネリー 2016)
 - * 教師教育の見直し(教師は小論文の優等生)

高大接続研究の盲点のひとつ:

「論理的な議論」とその表現法の社会・文化的な基盤の研究(渡邊 2021)
=試験と教育の「大前提」の解明となる(何を求めてるかの「メタ理解」)

日本への示唆：技術的な問題の根底にある 「目的（価値）」の精査とグラン・ドデザイン

教育の目的は何かのコンセンサスが先
次に手段としての必要な技術・能力とは何か

たとえば・・過去の大学入試の記述式問題導入の課題

- * そもそも記述式問題は必要なのか？なぜ必要なのかの精査
- * **日本社会で必要な能力の精査**
- * **大学教育の目的**の精査（十把一絡げに議論できるのか？）
- * もし必要ならば初等・中等教育との接合方法の精査を**先に**
- * **資格か選抜か**の精査（資格試験であるかのような共通テスト）

どのような社会を私たちは思い描き、教育するのか

教育と社会のグランド・デザインの中に

初等・中等・高等教育を位置づける→見えない障壁の精査

参考・引用文献

- * 細尾(2020); 夏目(2020); 大場(2020); 田川(2020)については、次のスライドの 細尾萌子・夏目達也・大場淳編『フランスのバカラレアにみる論述型大学入試に向けた思考力・表現力の育成』ミネルヴァ書房を参照。
- * 渡邊(2021)については、その次のスライドの 渡邊雅子(2021)『論理的思考の社会的構築—フランスの思考表現スタイルと言葉の教育』岩波書店を参照。
- * ボネリー, ステファン(2016)「学業困難は民主化政策にとって宿命か、それとも挑戦か」『教育の大衆化は何をもたらしたか—フランス社会の階層と格差』園山大佑編 効草書房, pp.201-215.
- * Kaplan, Robert B.(1966) “Cultural Thought Patterns in Intercultural Education.” *Language Learning* 16: 1-20.
- * 坂本尚志(2021)「なぜバカラレア改革は混乱を引き起こしているのか」伊藤美歩子編『変動する大学入試』大修館書店, pp.123-172.
- * 住谷裕文他(2005)「フランスのディセルタシオン試験はいかに行われるか—その受験風景(上)」『大阪教育大学紀要 第V部門 教科教育』53(2): 59-78.
- * 渡邊雅子(2012)「ディセルタシオンとエッセイ—論文構造と思考法の米仏比較」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』58(2): 1-13.
- * Watanabe, Masako, E., 2015, “Typology of Abilities Tested in University Entrance Examinations: Comparisons of the United States, Japan, Iran, and France,” *Comparative Sociology*, 14(1): 79-101=(加筆翻訳版)(2015)「大学入試でテストされる能力のタイプ—アメリカ、日本、イラン、フランスの大学入試問題比較から」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』62(1): 1-17.

関連する著書(報告の前半部分)

『フランスのバカロレアにみる論述型大学入試に向けた思考力・表現力の育成』細尾萌子・夏目達也・大場淳編 ミネルヴァ書房(2020)

- 1章: 論述型のバカロレア試験を介した高大接続のしくみ(細尾萌子)
- 2章: 現在のバカロレア試験で問われる思考力・表現力のフランス式特質(細尾萌子)
- 3章: バカロレア試験で問われる思考力・表現力の歴史的変遷(上垣豊)
- 4章: フランスのバカロレア試験が抱える諸問題とその対応策(ピエール・メルル)
- 5章: 思考と表現を練磨するフランスの「書く」教育(渡邊雅子)
- 6章: 論理的に考えて表現する力を育む高校教育—哲学教育—(坂本尚志)
- 7章: 論理的に考えて表現する力を育む中学校教育—科学教育—(三好美織)
- 8章: 論理的に考えて表現する力を育める教員の養成(大津尚志)
- 9章: 高大接続改革の動向と課題(大場淳)
- 10章: 大衆化した高等教育における学生受入の問題と改善に向けた取り組み
(田川千尋)
- 11章: フランスの職業高校における就職準備と進学準備をめぐる相克(夏目達也)
- 12章: 職業バカロレア試験の手法を探り入れたパフォーマンス課題(荒尾一彦)
- 13章: フランスの中等教育とバカロレア試験から何を学びとれるか(細尾・夏目・大場)
- 補章: 国際バカロレア(次橋秀樹)



関連する著書(後半部分)

渡邊雅子『論理的思考の社会的構築』岩波書店
-フランスの思考表現スタイルと言葉の教育-(2021)

第1部：論文構造から生まれる論理と思考法

1章：論文の構造と論理の型—エッセイとディセルタシオン

2章：哲学のディセルタシオンと哲学教育—吟味し否定する方法を教える

3章：文学のディセルタシオンと文学教育—文学鑑賞と論理的思考

4章：ディセルタシオンの歴史—伝統と革新の接点

第2部 論理的思考の段階的な訓練—言葉の教育の全体像

5章：小学校で教えられる論理—言語の内的論理と視点の一貫性

6章：中等教育で育まれる論理—「論証」から「弁証法」へ

第3部 判断し行動するための論理—推論する、討論する、合意するための教育

7章：歴史教育—過去の解釈と未来予想に見る推論の型と合理性の判断基準

8章：歴史教育の歴史に見る思考法の変遷

9章：市民性教育—合意形成の手続き

10章：フランス社会の“論理”の構築—ディセルタシオンが導く思考表現スタイル